

環境変化に適応したノリの品種開発と その普及に向けて

浅海干潟研究部 たけすえ なお き
武末 直輝

はじめに

本県のノリ養殖は主に有明海で行われており、生産量は全国第4位と全国有数のノリ養殖県です。ノリ養殖は水温が23℃を下回ってから開始されますが、近年の海水温上昇により、開始時期が年々遅れ、養殖期間が短縮しています。さらに、高水温による葉体の障害や、珪藻などの植物プランクトンの増殖に伴う栄養塩不足によりノリの色落ちが発生し、収量の減少や品質の低下を招くなど、安定した生産が難しくなっています。

当センターでは、こうした環境変化に対応できる品種の開発を継続的に進めており、ここでは、開発した品種を用いた現場養殖試験の取組みについて紹介します。

取組内容

1 開発した品種の特徴

平成23年度（2011年度）漁期に高水温と低比重（低塩分）による重度の芽流れ被害が生じた際に残存した葉体から作出した試験品種（名称：AH）を試験に使用しました。なお、本品種は、過年度の室内試験や野外水槽試験において、高水温下でも芽の形態異常が少ないことを確認しています。また、比較（対照品種）としては、漁業者が使用している従来品種を使用しました。

2 現場養殖試験の方法について

試験品種のカキガラ培養、試験網へのノリの種付けおよび漁場での養殖管理は、漁業者に協力いただき実施しました。また、本試験の種付けや養殖は、通常の養殖スケジュールと同様に適水温である23℃以下で実施しました。

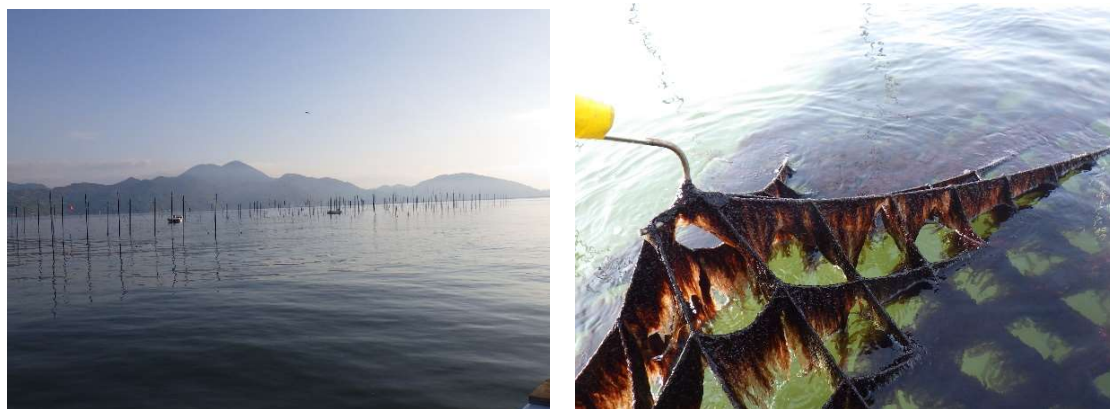


図1 現場養殖試験の様子（左：試験を行った漁場 右：生長した試験品種）

3 現場養殖試験結果について

生長については、初摘採直前の 12 月 6 日の平均葉長が、試験品種（AH）で 183.8mm、対照品種で 199.8mm と有意差は見られませんでした。同等の生長となりました（図 2）。

また、色調については、初摘採直前の 12 月 6 日および摘採後の 12 月 13 日の黒み度を測定したところ、試験品種の黒み度が優位に高かったものの、両品種の葉体も概ね正常な色調を保っていました（図 3）。

これらのことから、養殖適水温下では、試験品種（AH）の生長、色調はいずれも生産者が使用している品種と遜色ないことが確認されました。

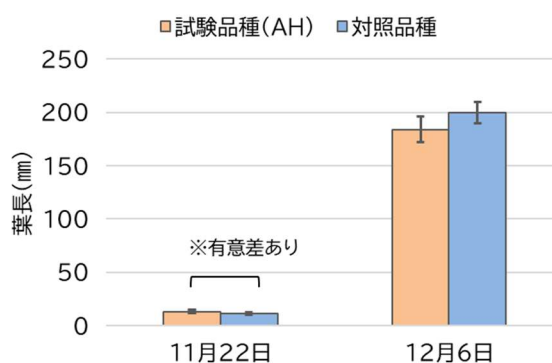


図 2 各区の葉長（バーは標準偏差）
区間の*は有意差あり

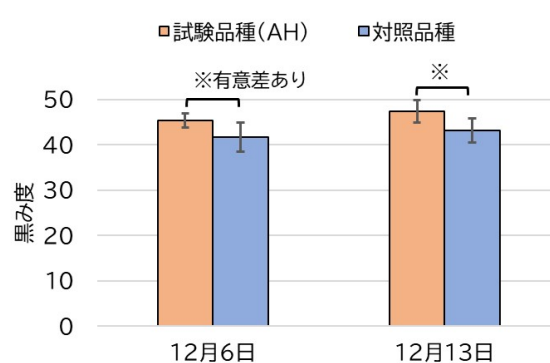


図 3 各区の黒み度（バーは標準偏差）
区間の*は有意差あり

今後について

これまでの試験の結果により、水産業普及指導員と連携した普及・啓発を行い、令和 8 年（2026 年）4 月より、荒尾漁業協同組合の協力のもと、試験品種（AH）のノリ種の陸上管理を行っています。

今後はこれらを使用し、複数の地区で現場養殖試験を実施することで、異なる環境下での生育状況を評価していく予定です。

引き続き試験を行い、生長や色調の改良を進めることで、最終的には本県のノリ品種の一つとして普及させていくことを目指していきます。